

あとがき

学部4年時に初めて敦煌変文と出逢ってから、今年でちょうど11年になる。生粋の文学作品というわけではなく、唐五代の人々の生活の息吹がそのまま感じられるこの手書きの写巻たちに魅せられ、思いもかけず、長い付き合いとなった。それでも、取り組みば取り組みむほどに奥が深く、見る角度を変えれば、そのたびに違った面を見せる変文の魅力は、いつまでたっても変わることはない。今回の論文は、そんな「秋の空」のような変文を少しでも客観的に理解したいと願って、韻文の全面的な分析を行なったものである。しかし、論文執筆によって得た収穫も多かった反面、これまで以上に疑問が深まり、執筆後もまるで「終わった」という達成感が感じられないのは、我ながら少し悲しい。一生付き合える素晴らしい友人を得たというべきか、結局、変文とは簡単に別れられそうにない。

計画書の段階では、変文の「読みもの化」を中心に考察するつもりであったが、第四章を執筆する過程で、意外にも講経文の韻文と唐代音楽との関係に興味を引かれることになった。俗講の上演方法については直接的な資料が多く、最も研究が進んでいる項目の一つであるため、分かったつもりになっていたが、突き詰めて考えてみると、唱い方や楽曲といった基本的なところでさえ、曖昧な部分ばかりである。大きな題目に切り込んで大雑把に論じるのではなく、分かったつもりの部分をもう一度見直して、小さな事実を自分自身で構築していく。「読みもの化」された語りものの特徴を論じる前に、語りものの上演方法についてさえも、まだまだ解明すべき点が多い。今回の論文は、研究における視点や論文の組み立て方をも気付かせてくれるよい経験となったと思う。

最後に、筆者の致命的な力不足のために退官されるまでには間に合わなかったものの、敦煌変文との出逢いを与えてくださり、絶えず新たな視野を広げてくださった吉川良和先生、的確で現実的な数多くの指摘を以って拙論を完成まで導いてくださり、論文執筆の怖さと楽しさを共に教えてくださった笹倉一広先生、そして、直接・間接的に最大限支えてくれた両親と、論文作成に尽力してくださった全ての方々に、心から御礼申し上げます。

橘 千早

平成21年3月